

池見澄隆編著

『冥顯論——日本人の精神史』

(法藏館・一〇二二年)

前川 健一

本書の編者である池見澄隆氏は、著書『中世の精神世界』(元版・増補改訂版)『慚愧の精神史』に示されているように、中世を中心として死や不淨、夢、恥辱・慚愧といった、従来の思想史の死角とも言えるような領域に、眼差しを注ぎ続けてきた。本書は、そのような探究の中から生まれた「顯界／冥界」という概念枠組みをテーマとした論文集である。

前著『慚愧の精神史』は、文字通り、「はだ」を大きなテーマとしているが、池見氏は「恥辱」(対世評的反応)「自恥」(対自照的反応。世評の内在化)の他に「慚愧」(対冥照的反応)というカテゴリーを立て、これを「冥衆(冥界の存在)」の照覧のもと、全裸の自己が一方的に透視されることへの衝迫的煩悶(『慚愧の精神史』一〇頁)としている。ここで「冥界」というのは、「世間」である「顯界」に対して、「その顯界の向こう

側に(あるいは上方に)ひろがる世界』(同ii頁)である。そして、「顯界からは冥界は物理的・心理的に不可視の世界であり、しかも冥界から顯界は透視可能であると信じられている』(同一〇頁)。この「顯界」と「冥界」との関係は「みえない—みられる」というまなざしの齟齬性』(同iii頁)と呼ばれているが、これが池見氏の「顯界／冥界」論の核心であり、本書の「序」にかえて「でもこの点が強調されている(なお、こうした「慚愧」や「冥界」「冥衆」は、あくまで分析概念であって、中世における実際の用法とは必ずしも対応しない)」。

このような「顯界／冥界」の概念枠組みにもとづく「冥・顯の精神史」の構想は『慚愧の精神史』「あとがき」で予告されていたが、それを実現したものが本書ということになる(企画段階では本書のタイトルは「中世——冥・顯の精神史」であった)。管見の限りでは、池見氏の論文では、一九八四年発表の「梓弓」説話の形成に初めて「顯界」「冥界」の語が見られ、翌年刊行された『中世の精神世界(元版)』の「プロローグ」「エピローグ」でも、この二つの語が使用されている。そこで注目されるのは、一九八二年に発表された「夢」信仰の軌跡であつて、この論文自体には「顯界」「冥界」の語は使用されていないが、『中世の精神世界(元版)』「プロローグ」では、この論文に言及して「冥界と顯界との回路をなす夢信仰」との文言が見える。「梓弓」説話の形成の主題の一つは、死靈を憑依させる口寄せ巫俗であり、そこに見られるものを「冥界と

「顕界との連続觀」と表現している。『慚愧の精神史』にまとめられる諸論文の発表が開始されるのは一九九四年からであるが、

それ以前から夢や巫俗に関わって、「顕界」「冥界」への関心があつたことが分かる。これらのことと踏まえるなら、本書「序」にかえて「たとえば夢という回路やシャーマニックな能力」（本書八頁）。

以下本書からの引用は頁数のみ記す）が言及されるのも、本書に収録された池見氏自身の論文が『比良山古人靈託』という憑依にもとづく文書を対象としているのも、必然性のあることであり、池見氏の持続的な関心の有り様を物語っていると言える。

それ故、「顕界／冥界」という概念は池見氏の研究活動を根底するものであり、池見氏の佛教大学退官記念論文集としての性格をも有する本書にとって、ふさわしいテーマと言えよう。

前置きが長くなつたが、「顕界／冥界」という本書のテーマが、いかなる来歴を有し、どのような問題関心のもとで着想されたものであるかということは、（個々の論文ではなく）本書を一冊の本として理解し、評価する上での前提となるものと考え、いささか難辞を避けた次第である。

所収論文と寄稿者を目次にもとづいて示すと、以下のとおりである（この他、巻末に「池見澄隆略歴」「執筆者紹介」「あとがき」が添えられている）。

「序」にかえて——冥・顕論の地平（池見）

論文要旨

第一部 冥・顕論の視点

冥衆との対話——慶政『比良山古人靈託』の場合（池見 淳二）

天皇像の変容——顕の歴史学から冥顯の歴史学へ（佐藤弘夫）

慈円の大懺法院と怨靈滅罪（善裕昭）

「幽冥神」の神話学——平田篤胤の「顕幽」論を読み直すために（齋藤英喜）

〔断章〕

消息一通（桜井好朗）

〔第一部 宗教史への展開〕

十世紀日本の自己贈与の言説——『三宝絵』と兼明親王の願文（稻城正己）

日本中世の釈迦と舍利——隠されているものの宗教史（工藤美和子）

宿業をめぐる冥と顕（笛田教彰）

明惠上人修行の場所——『夢記』をめぐつて（西垣安比古）

念仏・法華經の信仰と孝經——鎌倉仏教研究の課題と検討（今堀太逸）

〔第三部 冥・顕の多様性〕

現世の祈りと三界万靈——如來教における信仰共同体（林

淳)

みえない世界のかたち——奇跡の誕生（安藤佳香）

近代法華信仰にみる淨土觀の一断面——宮沢賢治の場合

(大谷栄二)

竈神にみる都と鄙——考古資料と古記録の検討（門田誠一）

京都における水の信仰と他界觀（八木透）

ソシユール『一般言語学第三回講義』覚書——時間、次元と空間（黒田彰）

本書の趣旨は、「中世を基本としながら、思想史・宗教・社会・民俗・考古・美術・言語の各方面から自由にかつ果敢に課題の解明につとめた」（一三頁）という池見氏による要約に過不足なく表現されているが、桜井氏の書簡に引かれる「企画趣意書」では以下のような構想が示されている。

「中世のテキストを読むとき、顕→冥の方向で、テキストが書かれていることを前提として近代の私たちは読解している」「この辺で視点を転換して、この前提をぶつ壊してもよいのではないか」「中世のテキストは、基本的に冥界→顕界の方向で、つまり冥界の存在のまなざしに誘導される形で、中世人は筆をとつていたのではないか」（一五三頁）。

以下、論文それぞれの内容を紹介し、上記のような企画意図がどの程度実現しているか検討してみたい。ただし、評者の理

解力の限界や関心の所在のため、各論文の紹介が均等でないことを初めにお詫びしておく。

「序」にかえて」は、「顕界／冥界」という概念枠組みの意義を述べ、既存の「他界」「異界」などの概念との関係を述べている。池見氏によれば、「顕界における冥界的領域」「可視的な冥界的領域」が「異界」ととらえられるという。また、従来の「異界」論では、「（顕界から）みえない」—（冥界から）みられる」（括弧内は評者の補足）という「心理的視覚」が闇却されおり、そこに自らの「顕界／冥界」論の意義があるとしている。

なお、この小文で池見氏は、現在の死生觀をめぐる状況をとらえ、「理性」というタガの抑圧を跳ね返すことが求められている時代」と判定し、そのような動向の意味の解明は「たとえば中世の人びとの想像的世界を内在的に理解し、追体験的にアプローチすることによって可能となる」（一三頁）としている。この言葉は、江上琢成氏による『慚愧の精神史』評の次のように一節を想起させる。「近代主義」による「信心・道心」の「合理的再編」を批判した時、その研究は近・現代における意義を殆ど喪失する。残る意義は、前近代宗教思想史研究としての意義だけである。そしてその残された魅力は決して大きいとはいえない（『仏教史学研究』五二巻一号）。江上氏の言葉と比較してみると、池見氏は「前近代」によって「近・現代」を乗り越えるという立場を自らのものとして表明したことになる

う。

池見論文は、慶政の『比良山古人靈託』を取り上げ、記述内容を慶政個人の思念に還元する傾向のある従来の研究に対し、慶政自身の意識に即して、あくまで天狗という他者と慶政との対話として分析を行っている。池見氏は、天狗と慶政が対話を通じて、表層の「公」の立場（天狗の場合、地域の根本惣領主。慶政の場合、九条家の護持僧）から深層の「私的な救済願望」へと移行し、それぞれが救済を予感するところで対話が終わるとしている（なお、本論文は池見氏の既発表の論文『『比良山古人靈託』の世界・覚え書——宗教史料分析の一視点』（『仏教大学総合研究所紀要』一五、二〇〇八年）の改訂版であるが、変更箇所は「はじめに」と「おわりに」に集中しており、本論部分にはほとんど変更はない）。

船田論文は、中世神道の理論家である慈遍の著作を取り上げ、そこに見られる「顕／冥」の所説を検討している。船田氏は、冥・顕の分割を主題とする『旧事本紀玄義』第三巻だけでなく、『天地神祇審鎮要記』をも視野に入れ、慈遍が冥・顕の不二を強調しながら、『旧事本紀玄義』では人代における冥・顕の分離によって政道論を裏付けるのに対し、『天地神祇審鎮要記』では安養淨土（極楽世界）である熊野を冥界として組み込み、死後の救済の問題を神道に導入したとしている。もつとも、本論文を読む限り、慈遍は日吉＝法華經＝二乗救済とするのに対して、熊野＝涅槃經＝一闡提救済としており（七六頁）、熊野

が安養淨土であるにしても、通常の意味での「淨土信仰」とは異なる意味を与えられているように思われる。また、慈遍は熊野參詣について「現世の望みに寄せて參詣の人をして結縁引撰せしむ」（同頁所引）と言っているが、これは中世の熊野參詣の目的に現世利益的なものが多かつたという指摘（たとえば小山靖憲『熊野古道』）と符合しているようにも感じられる。熊野が冥界であり安養淨土とされているのは事実であるにしても、それが慈遍において「死後の救済」を含意するものであつたかどうかは、もう少し検討を要するように思われる。また、本論文では、平安遺文・鎌倉遺文における「顕／冥」の用例からその意味内容を考察しているが、その解釈には検討すべき点が少くない。一例だけ挙げれば、「死後の墮地獄が「冥罰」（五八頁）としているが、たとえば日蓮は「やくび疫病やうは冥罰なり」（聖人御難事）と言つているので、単純に「冥罰」＝死後の罰とも言えないようと思われる。

佐藤論文は、「中世の天皇と仏教」（初出一九九四年、『神・仏・王權の中世』所収）や『神國日本』（二〇〇六年）をはじめとする著者の天皇論を略述したもので、取り上げられた史料や論述の仕方もおおむね従来のものを踏襲している。天武・持統朝においてアキツカミに引き上げられた天皇は、その後のコスモロジーの変化の中で新たな宗教的権威を獲得できず、政治的有用性によってのみ存続したとしている。いささか気になるのは、古代の天皇や陵墓については近年の業績が参照されている

ものの、中世についておおむね一九九〇年以前の業績だけが挙げられていることである。この二十年近く天皇論に関する本質的な進歩は何もなかつた、と佐藤氏は判断されているのだろうか。

善論文は、慈円の大懺法院で行われた怨靈滅罪の宗教行事の内容について論じている。慈円は、保元の乱以後の怨靈への対処が国家的課題であると考え、大懺法院ではこの目的を達成するための仏事が行われたが、そのうち毎日の勤行としては法華懺法・西方懺法、十五尊仏画の開眼供養、經典（法華經開結、般若心經、阿彌陀經）の開題供養が行われた。十五尊の中の阿彌陀仏に対する読まれる仏釈（仏を讚嘆する言葉）では、専修念佛者について言及され、慈円にとっては專修念佛者の惡行を懺悔することは、怨靈の滅罪と同様に社会秩序の安定に資するものであったと考えられるという。

斎藤論文は、従来の諸研究をたくみに総合し、平田篤胤の神道説において、「冥界」を掌るオホクニヌシが「顯界」の主であるアマテラスをも優越した神となる契機を、キリスト教や西洋天文学との接触に求めていた。斎藤氏には、本居宣長の『古事記』解釈を「近世神話」として解説する一連の論文があるが、その延長線上に位置づけられるものである。

桜井氏の書簡は、寄稿できないことのお詫びという形をとりながら、歴史叙述をめぐっての著書の思索が、きわめて凝縮したものたちで提示されている。

稻城論文は、主として今村仁司の理論を準拠として、源為憲の『三宝絵』に見られる捨身譚と兼明親王の發願文について分析し、この二人は自己の所与性を感じ、その負い目を返す「自己贈与」（自己そのものを相手を特定せずに与えること）を言葉にした稀有の人であつたと論じていて。素朴な疑問として、一種の教育用テキストである『三宝絵』や法会というそれなりに公的な場を前提とした發願文を、どこまで作者個人に帰属するものとして分析できるのか、気になるところではある。また、前提となる今村贈与論そのものの妥当性について何らかの説明が必要ではないかと思われる。

工藤論文は、日本中世にいたるまでの舍利信仰の歴史をたどり、貞慶の『舍利講式』（五段式）について分析している。貞慶は、釈尊が慈悲の発露として舍利を残して後世の衆生を利益するという従来の理解を超えて、經典にもとづいて舍利の本質を理論的に説明しようとして、釈尊の誓願によって衆生の發菩提心のために残されたものが舍利であると説いたとしている。本論文に関しても、願文の文言をどこまで貞慶個人の思想と考えられるかという点が問題になろう。しかも、貞慶の場合、他からの依頼で作成した願文が多いと指摘されており、貞慶の他の願文や、他の作者（たとえば覺鑑や明惠）の舍利講式との比較を経る必要があると思う。また、貞慶の『舍利講式』は、釈迦の誓願に注目した点で當時の佛教界に大きな影響を与えた（一九六頁）とあるが、その具体例は記されていない。この

「誓願」とは、『悲華經』の五百大願のことであるが、貞慶以前から知られているものであり、どのような意味での「影響」なのか説明する必要があると思う。

笛田論文は、日本にいたるまでの宿業觀の展開をたどり、日本では、經典に由来する宿業と明確な根拠のない「冥衆の力」との関係が問題になつたとし、主に『沙石集』の分析を通じて、「冥衆の力は宿業に影響を及ぼすことができない」という重要な論点を提示している。「宿業が過去世から現世・來世へと時間の推移のなかで働き続けるのに対し、冥加や冥罰は現世のみに作用し、それが來世にまで影響するものではない」ということである（二二六頁）。

西垣論文は、『夢記』や『明惠上人歌集』を素材として、明惠の宗教経験において、修行の場所をはじめとする住居がどのようにとらえられているかを考察し、兜率天に照らされ、事事無礙法界が開かれるところで、本来的意味における「すまう」ことが成立する」と論じている。夢といふものは多義的であるので、本論文のような解釈が不可能だとは言えないが、たとえば「明恵は上昇、下降の夢を多く見た」（二三七頁）というのは、少なくとも現存する夢記からすると断言を躊躇せざるを得ないし、その他にも基本的な事実認識で単純化のしすぎと思われる点が少くない。事事無礙法界などの仏教概念によつて夢を解説するにしても、二次文献に依拠するのではなく、まずは明恵自身による教理解釈を参照するべきであろう。

今堀論文は、「一 父母の孝養と法然・日蓮」「二 源平と神國・孝養・往生」「三 義經と弁慶の最期——念佛と『法華經』」「四 公家社会の中陰・年忌」の四部から成る長編の論文である（本書所収の他論文のおおむね二倍）。表題に直接かかるのは一と四で、孝思想と関連した「親供養が法華經読誦と念佛によって行われていることを各時代の事例によつて示している。」と三は、『平家物語』『義經記』を素材として、武士における孝經・法華經・念佛などの受容を検討したものであるが、史料の質や分析の視角が一や四とは異なるため、独立の論文とした方が分かりやすかつたように思われる。

林論文は、如来教の開祖である喜^きの教説に關し、特に死の受容の問題について論じている。神田秀雄氏や浅野美和子氏の重厚な研究を向こうにまわして、三界万靈の思想（篤信の信者が三界万靈を引き連れて後世に行くという教説）は、「病氣平癒という（評者注）信者の期待に応えられなかつた時点で、信者の離反を恐れた喜之が打ち出した切り札」（三一六頁）と断ずるのは、さすがであるが、そう言つてしまふだけでは、如来教や喜之の固有性を取り逃がすのではないか。「教祖の言葉は、時に信者を済度することはできたが、教祖自らの済度に及ぶことはなかつたのである」（同上）との結びの言葉も、間違つてはいなにしても、あまりにも一般論に解消しすぎのように思える。

安藤論文は大きく一部に分かれ、前半は安藤著『仏教莊嚴の

研究』の成果をもとに、ゲプタ式唐草や関連する文様が蓮華に象徴される創造的なエネルギーを表現したものであり、中国・日本では「氣」の視覚化という形で同様のエネルギーが表現されたとする。後半では、一木彫の仏像や鉈彫像について論じられ、それらが一見未完成に見えるのは神木から仏が出現しつつある状態を造形しているとの解釈が示されている。また、一木彫仏像の発生年代（八世紀前半）と開基伝承との重なりから、行基集団の関与を示唆している。安藤氏は学生時代より一木彫仏像に関心を持ち、その方面的開拓的研究者である井上正氏の指導のもと、長年にわたって調査・研究を行ってきただけあって、短いながらも充実した論述となっている。

大谷論文は、宮沢賢治の死後観について、主として妹との死別に關わる作品を中心として検討している。田村芳朗の説（日蓮の淨土觀を〈ある淨土〉〈なる淨土〉〈ゆく淨土〉に分類する）に依拠し、宮沢賢治は〈ゆく淨土〉（死後の淨土）の主觀的實在に確信を持つことはできなかつたが、〈ある淨土〉（現実世界そのものを淨土と見る）〈なる淨土〉（未来に建設される淨土）についての信念を有していたとされる。著者の分析に若干の違和感を覚えるのは、詩のような文学作品の表現を單純に作者の思想の直接的表明と解してよいのかという点である。「作品」として執筆・発表されている以上、それらは一種のフィクションであり、慎重な分析手続きが必要であろう。また、田中智学をはじめとする近代日蓮信仰の死生觀を分析するにあたつて、そもそも

「淨土」という概念を手掛かりにすることが適切であるのかと、いう点も検討の余地があるようと思われる。本論文でも言及されている国柱会の妙宗大靈廟に関する田中智学は「妙法から生れて妙法へ還る」と言つていて（『田中智学自伝』）。このような田中の死生觀がどの段階で形成されたのかは検討が必要だが、これを「智學の日蓮主義の持つ現世主義的な特徴に起因する」（三八一頁）と解することはできない。むしろ中世・近世の日蓮教学に由来するものと言うべきであり、それは天台教学の影響の強い唯心論的なものである。このような枠組みのもとでは、日蓮遺文に信者の往生すべき場所としての「靈山淨土」が記されていても、それは「法界の真理たる妙法」「法界の大元」（いづれも田中の言葉）と読み替えられることになる。このような推測が正しいなら、宮沢賢治が〈ゆく淨土〉に言及しないのは、単に当時の日蓮教学をそのまま反映しているに過ぎず、何ら不思議なことではないということにならないであろうか。

門田論文は、奈良時代・平安時代の遺構に見られるカマド祭祀と、平安後期の貴族社会における竈神祭祀が、内容を異にしており、連續性がないことを示している。前者では実際に使用される住居内のカマドに対して祭祀行為が行われたのに対し、後者では竈神は個々人に属するものとされ、神体である金属製の釜に對して祭祀が行われたという。

八木論文は、同著「珍皇寺の六道參り」（『仏教年中行事（仏教民俗学大系第六卷）』所収）の統編といふべきもので、題材や

叙述の仕方も重複する点が多い。珍皇寺の六道巡り、引摶寺の精靈迎え、祇園御靈会などにおける水の機能を検討し、京都においては靈や疫神が赴く他界として、鴨川の川下である淀川、さらにその延長にある難波の海が想定されており、益になると靈は水中を通って珍皇寺の井戸などからそれぞれの家々に帰つてくるのではないかとの仮説が提示される。

黒田論文は、ソシユールの『一般言語学講義』の第三回講義

「異界」と置き換える可能なもので、多くの場合、池見氏が強調する「みえない—みられる」というまなざしの齟齬性」やそれにもとづく主体の側の反応といった点には考案が及んでいないようと思われた。まして、「企画趣意書」で述べられたようなテキスト分析については、全く手つかずと言つてもよい。「顯界／冥界」という概念枠組みそのものの妥当性も含め、本書刊行を機に議論が深められていくことを望みたい。

(公益財団法人東洋哲学研究所研究員)

第二部における共時言語学の「時間」の問題について検討を行っている。黒田氏の理解では、ソシユールにおいて、通時言語学の時間¹¹（歴史的時間）と共時言語学の時間¹²（話す主体にとっての「今」）とは区別されるが、『講義』中の説明図では、後者が消失してしまったように見える。黒田氏はソシユールの「次元」の概念に着目し、本来「二つの時間（¹¹と¹²）と空間によって構成される三次元的な構造を、平面に投影したため、¹²が見えなくなっている、との理解を示している。黒田氏は最近の発言（『文学と夢』、『佛大通信』五五八号）で、フロイト・ソシユール・マルクスの三人を理解したいとの願望を語つており、この論文はその一環ととらえることができる（フロイトについては、黒田著『孝子伝の研究』に既に言及がある）。

最後に、この論文集全体を通しての感想であるが、冒頭で述べたような池見氏の「顯界／冥界」論の立場が各論者に共有されているようには必ずしも思えなかつた。「冥界」という言葉そのものは使われているにしても、それは従来の「他界」や